Osaka University Knowledge Archive

Title	障害学生支援における出会いを通じた規範の変容に関する研究 ： 大阪大学におけるアクションリサーチ
Author(s)	松原, 崇
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49443
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【6】

氏　　名	松原　崇（まつばら　たかし）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　２２４４５　号
学位授与年月日	平成20年９月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	**障害学生支援における出会いを通じた規範の変容に関する研究：大阪大学におけるアクションリサーチ**
論文審査委員	（主査） 准教授　渥美　公秀 （副査） 教　授　堤　　修三　　教　授　中村　安秀

論文内容の要旨

本研究では、大阪大学の障害を有する学生の修学支援の現場におけるアクションリサーチの結果に基づいて、出会いに生じる規範の動態を考察し、高等教育における障害学生支援の実践に寄与する知見を得ることを目的とした。

第１章では、高等教育における障害学生支援の現状と先行研究を概観した。そして、それらの多くが共に、障害学生の問題を身体の欠損や機能障害に付随して生じるものとする立場に依拠しているために、障害学生の個人的な適応支援を強調しがちであることを指摘した。それに対して、本研究では、障害学をはじめとする近年の障害研究における障害観の転換を参照し、人々の間で構成される社会的現象として障害（ディスアビリティ）を捉える立場に依拠することとした。そして、高等教育における障害学生支援を、高等教育が生み出すディスアビリティの解消の問題として捉え直した。

そのように再構成した問題に向き合うにあたり、本研究では、規範を典型とする集合体の全体的性質と、個々の成員の行為や認識との動的な相互規定関係を扱うグループ・ダイナミックスの枠組みに依拠することとした。第２章では、Atsumi（2007）の提唱する物語-設計科学の概念から、グループ・ダイナミックスを概説した。物語-設計科学としてのグループ・ダイナミックスは、現実を人々の間で社会的に構成されるものと捉え、フィールドの当事者との協働的実践を通じて、より良い現実の設計に向け、生成力のある理論の構築を目指す。本研究では、こうしたグループ・ダイナミックスの枠組みから、大阪大学の障害学生支援の現場において、ディスアビリティの解消を目指したアクションリサーチを実施した。その際、障害学生との出会いを通じて生じる規範の変容に焦点を当てると共に、障害学生との出会いの演出を通じたディスアビリティ解消の可能性を検討した。

第３章では、本研究のアクションリサーチのフィールドとなった大阪大学の障害学生支援について、その概要を報告し、支援体制が構築されるまでの取り組みの経緯を概観した。支援体制が構築されることで、障害学生支援の問題は、障害学生の周囲で個別に対応され

るべき問題から、形式上は、大学全体として対応されるべき問題へと制度的に再構成された。支援体制が構築された結果、従来、困難を覚えつつも「健常者」として大学生活を送ってきた「潜在的障害者」のカミングアウトが生じ、大学の障害学生数は倍増した。しかし、他方で、障害学生に関わることのない、大学の大多数の障害のない成員は変化のないままであるという課題も残された。

そうした課題に取り組む手がかりを得るために、第４章では、障害学生支援を通した筆者と障害学生のひとりとの日常的なやり取りに注目した。特に、そのやり取りのなかで筆者が経験した〈身の置き所のなさ〉に着目し、規範の形成過程を説明した大澤（1990）の社会学的身体論の見地から考察を行った。社会学的身体論によれば、規範は、相互に互換的な水準にある複数の身体から、それらの身体の経験の妥当な領域を規定する第三者の審級がはじめから存在していたかのように擬制されることによって形成される。こうした社会学的身体論の観点に基づき、第1に、〈身の置き所のなさ〉とは、身体の求心化-遠心化作用を通じて、潜在化されていた行為の可能性が顕在化することにより、偶有性が露呈する〈出会い〉の場面であるということ、そして、第2に、蓋然的ではあるものの、〈身の置き所がない〉瞬間こそ、安定した規範を変容させ、新たに〈他者〉との間で第三者の審級を再投射する可能性が開けることを指摘した。しかし、〈出会い〉から新たに第三者の審級を投射する過程に入るか否かはあくまで蓋然的である。そのため、第５章と第６章では、大阪大学において実施した障害学生との〈出会い〉の演出を目指したアクションリサーチの成果に基づき、その蓋然性を高めるためにどのような演出が求められるのかを検討した。

第５章では、『バリバリマップ』と題する、障害を有する利用者に向けた大学キャンパスのアクセスマップ作りの取り組みを事例として取り上げた。この取り組みでは、障害のない学生が、地図のデータや資料を集める調査過程や、調査結果に基づく地図作りの過程を通して、障害者のアクセスを妨げる障壁（バリア）や、それを可能にする設備に敏感になる様子が観察された。その結果を地図の可視性と社会性に着目して考察し、第1に、バリバリマップは障害者の物理的なアクセスに関わる社会的現実を可視化したこと、第2に、バリバリマップを作成する過程への関わりが、障害者を含む参加者の対話を促し、障害を持たない参加者に障害者の社会的現実の一端を共有させる契機となったことを指摘した。

第６章では、『バリバリツアー』と題する、障害（者）の疑似体験を目指すワークショップを事例として取り上げた。障害（者）の疑似体験は、一般に、車いすやアイマスクのような補装具・拘束具を用いて、健常者の身体上に障害者の身体状態を再現させることで可能になると考えられてきた。しかし、こうした障害疑似体験に対しては障害学や障害当事者組織を中心に批判的な見解が提出されてきた。そこで、本章では、体験は人々の間の対話を通じて協働的に構成されると考える社会構成主義の観点に依拠して構築したバリバリツアーを事例として、新たな障害疑似体験の方向を提示した。つまり、障害（者）の疑似体験とは、障害当事者に寄り添い、障害当事者と協働である事柄を障害（ディスアビリティ）として意味付ける過程に参加者を上手く巻き込むことによって可能になるとする「障害協働体験」プログラムを提案した。

最終章となる第７章では、本研究の成果の実践的意義と理論的意義を整理した。高等教育における障害学生支援に対する実践的意義として、本研究が、高等教育が生み出すディスアビリティ解消の実践的アプローチとして、障害学生との〈出会い〉の演出という観点を示し、その理路とツールを提案したことを挙げた。また、高等教育に対する実践的意義として、アイデンティティが確立する青年期における障害学生との〈出会い〉を通じた「役割実験」の機会の必要性を挙げた。障害研究に対する本研究の理論的貢献として、本研究が、従来のディスアビリティ解消の実践的アプローチのなかでも、Zola（1988）の「障害の普遍化」アプローチの概念を理論的に深化したことを挙げた。グループ・ダイナミックス研究に対する理論的意義として、社会学的身体論に基づき、異なる規範との接触界面に生じる規範の動態を説明したことを挙げた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、高等教育における障害学生支援という課題にグループ・ダイナミックスの枠組みから取り組んだものである。第１部では、高等教育における障害学生支援を巡る従来の国内外の実践や議論を障害学における障害の社会モデルに注目しながら整理し、その理論的意義をグループ・ダイナミックスの観点から検討した上で、高等教育における障害学生支援に関する問題を適切に構成している。また、本論文のフィールドとなった大阪大学障害学生支援室について、その前身である身体障害学生支援室の設立経緯や支援体制の構築過程を詳細にわたって紹介している。

第２部では、大阪大学の障害学生支援の現場における長期のアクションリサーチが豊かに記述され、理論的考察が加えられている。具体的には、第4章で障害学生支援室を通した筆者と障害学生との日常的なやりとりに注目し、規範の形成・変容過程として理論的に分析し、第5章、第6章では、障害学生とともに大阪大学のアクセスマップを作る実践や、障害疑似体験を批判的に検討した上で実施したワークショップの実践について、その経緯を詳説するとともに、高等教育機関における障害学生支援に対する意義を理論的に検討している。

第３部では、本論文が、高等教育における障害学生支援という課題に対して有する理論的、実践的意義が総合的に検討されている。具体的には、高等教育における障害学生支援の現場を異なる規範との接触界面に生じる規範の動態として説明し、そのことが高等教育機関において障害学生との<出会い>の演出として了解されることを示し、さらに実践的なプログラムが展開できることを考察している。

本論文は、従来、個人的な適応支援の問題として語られてきた高等教育における障害学生支援を、大学という集合体が構築する障害（ディスアビリティ）の解消の問題として再構築することにより、それまでの実践や議論に新たな視点を提供している。また、フィールドでの長期に渡るアクションリサーチを通じて、理論的考察を深め、実践に資するツールを提案していることは、フィールド当事者と研究者との協働的実践を重んじるグループ・ダイナミックスの研究として評価できる。

以上の理由により、本論文は、博士（人間科学）の学位の授与に値するものであると判定された。